



TITLE:

# ゴシック建築の空間論的研究( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

前川, 道郎

---

CITATION:

前川, 道郎. ゴシック建築の空間論的研究. 京都大学, 1968, 工学博士

ISSUE DATE:

1968-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212743>

RIGHT:

氏 名	前 川 道 郎 まえ かわ みち お
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	論 工 博 第 189 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ゴシック建築の空間論的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 増田友也 教授 川上 貢 教授 福山敏男

### 論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、12世紀の中期のイル・ド・フランスにおけるその誕生から、13世紀初頭に至る北フランスでの最初の展開期におけるゴシック建築——即ち、サン・ドニやノワイヨンからランスやアミアンに至る諸聖堂——の空間の象徴的意味を論究する事を通して、ゴシック建築の超越的空間としての現象を明らかにしようとするものである。この研究において、サン・ドニ修道院長シュジェール（1081～1151）により著された「統治書」と「献堂書」が、当時の建築思想を探る主要な文献として用いられている。

本論は四章よりなる。第一章は聖なる空間一般の象徴的意味を論ずる。まず、空間とは対象事物に対する心的なかかわりの現象、すなわち現実の世界から隔離された一つの世界であることを確認し、とりわけ、聖なるものの体験における、聖なるものの空間化の優位を神話的空間に関して考察し、聖なるものと人間とのなかかわりを象徴的空間として把握する。そこで聖なる世界は俗なる広がりから切り出され、異質化されなければならないとして象徴的空間としての隔離現象に、中心的事物による領域形成的な空間の構造化と、限界づけとしての壁による非構造的な空間の形成の二つの発生的形式を認め、かつ、多くの聖所は、これら二つの形式の複合としての空間現象であり、従って聖なる空間は固定点や中心軸によって定位され構造化された空間であるとする。そして、感覚化された地上の聖所を観念の世界の啓示であるとして、地上の聖所は、超越的、究極的実在としての神の象徴として、究極的実在のもつ力に参与し、それを分有すると共に、俗なる領域と聖なる領域の境界閥として、究極的に無制約的に聖なる実在に至る通路となると結論して、地上の聖所の象徴的空間としての意味を明らかにしている。

第二章はゴシック建築の空間の視覚的構造を論ずる。まず限界づけとしての壁の視覚論理的な構造価値を指摘し、また、側廊や廻廊や放射状祭室が、この壁と共にあって、円柱性の排除を通じて、いわば薄膜状に長堂の空間を限界づける状況への展開を記述し、それを「自ら光る壁」による限界づけとしての隔離的空間の現象であるとする。次に、空間の水平性と垂直性及びそれらの両方向の拮抗を、主として壁面構成を通じて分析し、壁面そのものもまた、構造的な空間形成として、象徴機能をもつとし、13世紀初頭ま

でのゴシック建築においては、水平には主として交叉部の効果によって、また垂直には、主としてトリフォリウムの効果によって、(初期には第一層の物質支持的な円柱と第二層以上の浮揚するが如き軽さとの対比によって)、二つの領域——天上的方向と地上性——の共在が指示されているとして、奥行と高さへの表象が視覚の非限定化を通じて深さの表象へと転じ、無限性を示す非完結的な空間が現象すると論ずる。そこで、空間の統一化の完成を13世紀中期以後のことであるとし、それはこれとは異なった精神の空間化であるとみなす。さらに、交叉部と内陣におかれた二つの主祭壇による東西の軸線の構造化と袖廊による南北の軸線の構造化との緊張に、三つのばら窓が参与するのを見るが、この時、交叉部に光の世界が現象すると共に、内陣の祭壇の空間構成への参与とあいまって、やはりそこには非完結的に無限定性を象徴する空間が現われると理解する。

第三章は祭壇の空間構成的機能を論ずる。まず祭壇の二つの機能——聖人の墓所と聖餐の卓——を指摘し、次に主祭壇の信仰的並びに儀式的優越性に触れた後に、本論文の対象とする時期に聖パンの掲揚がミサの核心となることを説き、それが聖パンにおける神の現存性に対する直視の欲求の現われであるとする。さらに、シュジェール修道院長による聖ドニの祭壇を飾る宝石類におけるアナゴジカル(神秘的)な体験に言及して、祭壇においてガンツ・アンデレな体験が生じ、そこに聖なる空間が求心的に構造化されるとする。かくして、ゴシックの空間は、本来は限定的な壁による象徴的機能と、祭壇のそれとの複合的な空間の現象であると説明する。

第四章はゴシック建築の空間の象徴的意味を明らかにする。シュジェールの時代の精神界の最大の指導者であった聖ベルナルが、肉体的・感覚的なものをきびしく排撃したのに対し、フランス王家と密接な関係にあったサン・ドニ修道院の院長たるシュジェールは、その価値を認め、神への捧げものを可能な限り光輝あるもので飾る事こそ神に仕える道である事を強調し、貴金属や宝石類で祭壇を飾り、また、建物に新しい光輝性を求める事において、新しい建築空間の誕生をもたらしたのであるとする。しかも、その際、光は単なる物質による感覚的な光ではなくて、物理的な光輝性とは、精神的な照明によって観者の心を照らす事をも意味するということが、1140年の西正面およびナルテックスの献堂式と1144年の内陣の献堂式に際して彼の銘した詩によって明らかであるという。さらに、シュジェールにおけるこのような光の認識の神学、とりわけ、この修道院の守護聖人と誤り伝えられてきたディオニソス・アレオパギタの光の神秘主義に注目する。アレオパギタによれば、光とは神の自己啓示であり、すべての可視物は究極的には神自身である「真の光」を映し出すところの物質的な光であるが故に、人間の心は、物質的なものの手引きによってのみ、物質的でないところのものに昇りうるものであり、そこで、シュジェールは、このディオニソスの意味における光のアナゴジカルな機能を強調し、あらゆる光輝性のなかに、物質的な世界から非物質的な世界へひきあげる力を認めていると論ずる。さらに、ゼードルマイヤとフォン・ジムソンとフランクフルトといった現代の著名なゴシック建築の研究者におけるゴシック建築象徴論の批判を通して、ゴシック建築における象徴の意味と機能を明らかにし、とりわけ、ゼードルマイヤの感覚主義とは逆に、ゴシック聖堂は、神の世界の感覚化ではなく、人間の世界の精神化であると説く。そして、聖堂の西正面が神の世界そのものの地上的顕現として、それ自身聖なる空間であるところの聖堂への玄関であると共に、また、聖堂それ自身が、神の国なる究極的に聖なる空間に至る門、通路、すなわち、地上の世界と天上の世

界をつなぐ絆であり、しかも、地上的顕現としての聖なる空間は、それが天上の究極的に聖なるもののもつ力にあずかることができ、自ら聖となるのであり、その故に、この二重の空間的意味が合一すると結論し、森田慶一名誉教授の述べる「超越的空間」における「超越性」がここに明らかになったであろうと結んでいる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、ゴシック建築の空間について、それが象徴的であり、超越的であることを論証しようとするものである。

その論証の冒頭において、筆者は慎重に、その対象を限定する。すなわち、8世紀にも及ぶ長い歴史的経過をたどり、ほとんど全ヨーロッパに流布したゴシック式建築の第12世紀における発生から、その様式的確立期、に至るまでのほぼ1世紀間の、北フランスの聖堂をその研究対象とする。この限定によって盛期ゴシック建築以降に現われてくる様式的な過剰や、墮落を避け、様々な通俗的な象徴説を遮断し、発生期における空間的形成を詳細に検討してその上で、建築理念を当時のサン・ドニ修道院の院長であると共に、ゴシック建築様式の創始者たるシュジェールの手記や、その他の同時代文献によって論定するのである。

ゴシック建築研究の権威者と目されているものは、今世紀以降においても十指に余るのであるが、それらのうちのあるものは、最近の考古学的、あるいは文献学的研究の結果、次第にその価値を失ないつつあるが、筆者は、これらの論者を拾く参照した上で、その中から比較的最近の権威者である E・パノフスキ、H・ヤンツェン、H・ゼエドルマイヤ、O・V・ジムソン、P・フランクル、特に後の三者の象徴説を、批判的に取りあげている。ゼエドルマイヤによれば、ゴシックの大聖堂は、黙示録のヴィジョンを源泉とした天上の都、エルサレムの生き写し、Abbild であると言う。聖堂を天上のエルサレムとする説は、かなり広く承認されている説であるが、しかし、それが何故に Abbild であり得るか、を説くに当って、それが黙示録における原像と、外観や形態的意味が相似であり、また聖堂内での空間的経験からも、中世的心理が、ただちにそれを教義的エルサレムと同一視すると主張する。ジムソンもまた、中世人にとって諸現象は、シンボルとしてのみ実在性をもつものである故に、超自然的な神の世界、天国を実在として理解するのに、聖堂の象徴性さえ強ければ、それが可能であるとする。そうしてその象徴性とは、聖堂における光と秩序とが、天国の光と秩序とに Analogy をもつことによって成立すると言う。ゼエドルマイヤやジムソンにかぎらず、ゴシック建築を知るほどの者ならば、その空間のステンド・グラスによる多彩な光について知らぬものはない。ただその輝く空間の経験において、ゼエドルマイヤは、中世人がただちに超越的神の世界を直観するとし、ジムソンは、その光が、教義における天国の光と Analogy をなすことにおいて象徴となり、その象徴において神の啓示をうけるとして、直観説と象徴説とにわかれるのである。これらのいわば教義的立場に対して、フランクルは、芸術的立場に立つ。フランクルによれば、シンボルに、意味のシンボルと形式シンボルとあって、前者が教義的であるとすれば、後者は芸術的であって、聖堂のシンボルはまず形式シンボルを主とし、意味のシンボルはそれに相即すると言う。形式シンボルとは形式の感情的内容であって、この場合はその宗教感情的内容が教義の説くところと一致することによって、ゴシックの建築芸術が完成するのである。フランクルを芸術的立場での象徴説と見ることができる。

筆者もまた、芸術的立場に立ち、その点において前二者と異なり、またその象徴論が形式よりも、空間論を方法としている点でフランクとも区別される。

筆者はシトオ派の聖ベルナルの *Apologia* と呼ばれている書簡（1125頃）を引用しているが、それはロマネスク様式の修道院聖堂の巨大な高さ、極端な長さ、余分な幅広さや高価な光るもの、などを口を極めて非難しているのであって、当時すでに聖堂建築においてこのような反教義的傾向を顕著に見せていたことをものがたる。聖ベルナルはしかし、修道士たちに対しては非難するこれらのことを、司教たちに対しては、それが肉体的な民衆を精神的なものに高めるための手段として肯定している。言いかえるとこの禁欲主義者も、聖堂の高さや、長さや、輝きなどの精神化的効果は認めているのである。ところで筆者は聖堂の内部の高さ（30米前後）や、深さ（100米前後）などの意味するものを、超越的なものの表現であるとする。超越的なものとはR・オットによれば、*Ganz Andere* であって、それはまた畏怖的神秘であり、魅惑的神秘であるとするが、P・ティリッヒはさらに、それはあらゆる神秘を超えた神秘であって、究極的なものであると言う。この究極的なもの、すなわち神については、シュジェールの時代に、誤ってサン・ドニの聖者として祀られ、信仰されていた神学者、ディオニソス・アレオパギタ（500頃）は、筆者によれば、神は啓示されんが為に、人間の前から姿をかくすのである、と書いている。これらの究極的なもの、あるいは神が、表現的により高く、より遠くに措定されるのは当然であり、通説である。

しかしゴシックの聖堂は、その光の処理においてロマネスクのそれと懸絶する。ゴシックの最初の誕生とされているサン・ドニの内陣の献堂式（1144）に、筆者の引用するシュジェールは、祭室群の丸い連続のゆえに、聖堂全体が、極めて聖なる窓のすばらしい、妨げるもののない光で以て輝き、堂内に美を満している、と描写している。光と輝きとは、ゴシック聖堂創始者の発想であった。光がすなわち神の象徴であり、神の啓示であり、神の国の *analogical* な表象にはかならぬ。

これらの高さや、深さや、輝きなどがそれぞれ超越的なものを表現するための手段であるが、それが空間化されるためには、聖化のための隔離を必要とする。そこで筆者は、クリアストオリにおけるステンド・グラスの空間的機能の重視から、H・ヤンツェンが、ゴシック聖堂の全壁面を、*Raumfolie* で裏打ちされた透明壁とするのに賛成せず、ヨハネネス書簡の、ここには窓は一つもなく、その他の開口部もなかった、それは紅玉その他の宝石の輝きが、非常に明るい空と太陽の輝きによってかけることのない様に、を引用してそれを光の壁と見るD・フライと共に、しかしフライとは違った意味で、自ら光る壁とする。その自ら光る壁に囲われることが、フランクの言う形式シンボルと相俟って、超越的なものの象徴的空間が成立するのである。その象徴的空間をさらに聖化し、この聖化によって空間を濃密化し、そうしてまたその空間に記号的軸性を与えるものとして、筆者は、主としてY・ヒルンにしたがって、祭壇の象徴的意味を検討し、しかる後にその空間的機能を考察する。ここにおいて、筆者の空間論的研究は、他のすべての象徴論的なゴシック建築研究者と袂をわかつ。

このようにして聖化された象徴的空間が、如何にして超感的に超越的なものを象徴するのであろうか。その場面で、人はどのようにして神の国を、超越的に知ることができるのであろうか。筆者は、デュランデウス（1230～96）の神典大全その他を参考して、それを聖壇の、または空間の *anagogical* な機能であるとする。*anagogical* な機能とは、デュランデウスによれば、超地上的なものとの形而上的な結合

である、と言う。それは deixis が空間を指示するように、経験的空間が形而上的空間を指示する作用であるらしい。筆者の引く統治書で、シュジェール自身 anagogical な方法で、より高き世界にうつされることができるように思われる、と説いている。創立期の、ゴシック聖堂の象徴的空間が、斯くして超越的空間を表現し、それを支えていることを、筆者は、中世的な anagogicus mos の観念を媒介として論証するのである。

建築の空間論は、なお若い建築理論であるが、筆者は中世建築に沈潜することによって、単にゴシック聖堂の空間的特質を十分に論理的に、明らかにしたのみならず、空間論そのものの有用性をも実証したことにおいて、偉とすべきである。

よって本論文は、工学博士の学位論文として価値あるものと認められる。